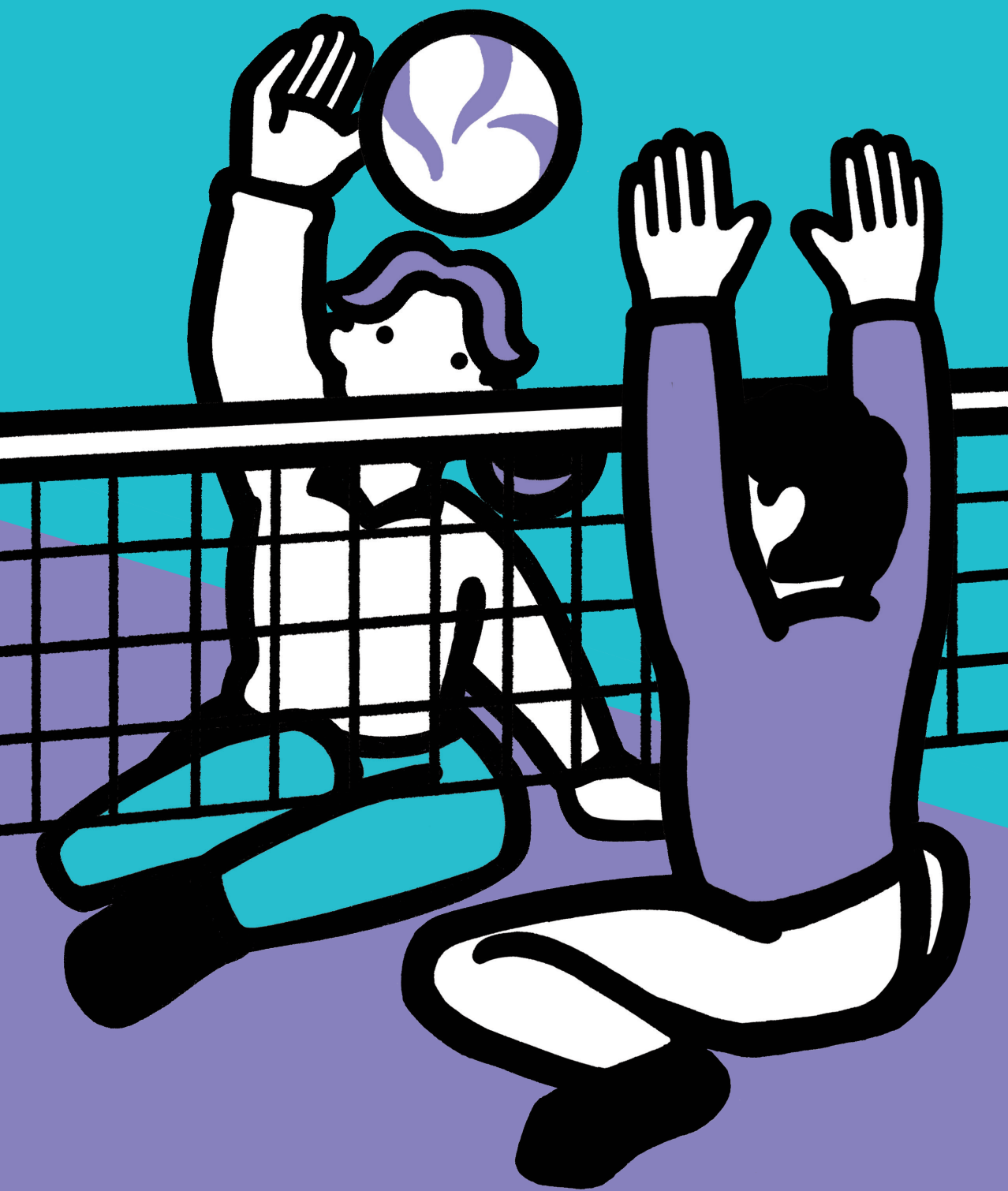


学研・教科の研究

体育・保健体育ジャーナル

第 33 号
2026

Gakken



「知りたくなる・見たくなる国際的なスポーツ大会」を
きっかけとした体育理論の授業展開

乳井 勇二(育英大学 講師)

教員間のリスク共有から考える学校安全

—「けがの防止」におけるリスク要因の可視化を通じて—

安永 太地(早稲田大学 講師)

シリーズ からだとスポーツ・健康 第2回

武田 友孝(東京歯科大学 教授)

連載 WITH SPORTS 藤木 豪心さん(フリースタイルスキー男子モーグル選手／テレビ局ディレクター)

「知りたくなる・見たくなる 国際的なスポーツ大会」をきっかけとした 体育理論の授業展開

育英大学 講師 乳井 勇二

1 中学校学習指導要領における 体育理論領域

中学校において「体育理論」が必修として位置付いたのが平成20年告示の学習指導要領¹⁾です。さらに平成29年告示の学習指導要領²⁾では改訂の趣旨及び要点において、『「する・みる・支える・知る」といった生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現していく資質・能力の育成に向けて、運動やスポーツの価値や文化的意義等を学ぶ体育理論の学習の充実(中略)が必要である』と示されました。しかし、必修が義務付けられてから15年以上の月日が経った今でも、「教員の苦手意識」や「時数不足」などの理由で実施率の低さが改善されていないのが現状です³⁾。

2 国際的なスポーツ大会などを 教材として扱う際のポイント

体育理論領域ではそれぞれの学年で、生涯にわたる豊かなスポーツライフを送るうえで必要となる知識や思考力、判断力、表現力等を身に付けていくことが求められています。

その中で、中学校3年間を見通して、共通の題材で授業計画を作成することも効果的です。例えば、「オリンピック・パラリンピック競技大会」を教材として扱う場合、まず第1学年では、「運動やスポーツへの多様な関わり方」の内容において、これまで競技場などでの観戦やテレビ、インターネットで見たことのある国際的なスポーツ大会や選手を挙げ、チームや選手のデータを見たり、東京2020オリンピック・パラリンピック(2021年に実施)では選手以外にどのような人たちが関わっていたのかを調べたりするなど、さまざまな視点で調べ学習を行うことで、「するスポーツ」以外の「みる・支える・知るスポーツ」を

同時進行で楽しむことができ、メガスポーツイベントの価値や効果について学ぶことができます。

第2学年では、「運動やスポーツが心身及び社会性及ばす効果」の内容において、オリンピックの目的の一つである「フェアプレイ」のエピソードを教材とすることが効果的です。スポーツへの参加は運動の好き嫌いや、得意不得意が影響してしまうことがあります。しかし、ルールやマナーを尊重すること、相手や仲間のよいプレイを称賛することなど、フェアプレイの理解を深めることで社会性を高める機会にも繋がります。体育理論でこのような点について学ぶことができれば、運動領域の際にも運動の得意不得意に関係なく、授業に参加している全員が互いに認め合いながら意欲的に取り組む授業実践に繋げることができるはずです。

第3学年「国際的なスポーツ大会などが果たす文化的な意義や役割」の内容では、スポーツの価値や意義について改めて考えていくことも重要ですが、学習者の興味関心を高めるために直近のオリンピック・パラリンピック競技大会で印象に残っている出来事について触れることも大切です。

また、昨今の国際的なスポーツ大会は、FIFAワールドカップ、ワールド・ベースボール・クラシック、オリンピック・パラリンピック競技大会など数週間にわたり大会が行われます。大会前後では毎日のようにメディアに取り上げられるなど注目度も高く、スポーツへの興味関心が高くない人でも耳にしたことがある選手やチームがあることが予測できます。まずは学習者に対して「前日のスポーツニュース」や「その年に行われるスポーツのビッグイベント」などについて積極的に問いかけ、個人やクラスの実態を確認しながら学習内容を検討していくことも大切です。

3 題材として取り上げる際の 注意点

このように、体育理論で取り上げやすい題材が豊富な国際的なスポーツ大会ですが、注意しなければならないのは、それぞれの学習内容で何を学んでいるかを明確にすることです。一つのエピソードでも、学習者の見方や感じ方、説明の仕方が変わるだけで、学ぶことができる内容にも差が出てしまいます。

学習指導要領においても、中学校第1学年「運動やスポーツへの多様な関わり方」の内容では、「運動やスポーツには、『する・見る・支える・知る』などの多様な関わり方があることを理解できるようにする」と示されています。これまで「するスポーツ」という視点しか持つことがなかった学習者に、応援や審判、指導者などを紹介しながら多様な関わり方があることを理解できるように進めていくことも大切ですが、授業時数も限られている中で、学習内容を明確にして、テーマを絞りながら興味関心を高めることが重要です。

4 国際的なスポーツ大会を 題材として扱った授業実践案

今回は、中学校第1学年の「運動やスポーツへの多様な関わり方」の内容での実践案を紹介します。

学習のねらいを「世界で活躍している推しのスポーツ選手を見つけ、友達に選手の魅力を伝えよう！—『する』だけではないスポーツの楽しみ方を理解する—」として、以下の内容で授業を進めます。

4-1 導入 興味のあるスポーツ選手を見つけよう

導入では、タブレット端末等で、学習者各々で興味のあるスポーツ選手について調べ学習を行います。

その際教師から、2026年開催のスポーツビッグイベントである「ミラノ・コルティナオリンピック・パラリンピック」、北中米で開催された「FIFAワールドカップ」、名古屋で開催される「第20回アジア競技大会」や、ニュースに取り上げられている選手について触れ、調べ学習の助言を行うとスポーツに興味関心が高くない学習者もスムーズに調べることができるはずです。

また、競技種目から調べるだけでなく、聞いたことがある選手の名前や地元出身の選手、SNSのフォロワー

数が多い選手など、学習者が興味を持ちやすいヒントをたくさん提供することも大切です。

4-2 展開 推し選手の特徴や成績を調べ、 仲間に伝えよう

興味のある競技や選手が絞られてきた段階では、「なぜその選手を選んだのか」、「その選手にはどんな特徴があるのか」などについてさらに深掘りしていきます。

その後、グループワークを実施します。事前に発表内容を設定しておくことで学習者も調べやすくなります。例えば、①その選手を選んだきっかけ、②その選手を選んだ理由、③その選手の活躍がわかるデータなど、学習者の興味関心や好みが垣間見えるような設定にすることで、調べる側も聞く側も楽しみながら進めることができるはずです。

4-3 まとめ 推し選手を通じて理解したスポーツの 魅力をまとめよう

まとめでは、「推し選手を見つけ、その魅力を伝える」ことについて、これまで経験したことのないスポーツの楽しみ方(競技や選手のパフォーマンスを見ること、選手や所属しているリーグのメディア露出状況や活躍の背景を知ること)についての気づきをまとめることで、学習の振り返りを行います。

授業時数や時間配分に余裕があるようでしたら、国際的なスポーツ大会では選手以外にどのような人が関わり、貢献しているのかなどに注目し、「支えるスポーツ」にも触れることができれば、多様な関わり方について幅広く学習することができます。

上述したのは、あくまでも一つの案です。スポーツへの関心度や身近に活躍している選手は地域や学習者の実態によって異なります。授業の目的を明確にし、学習者が興味を持ちやすい題材を見つけ、体育理論が教師も学習者も楽しめる領域になってほしいと願っています。

● 参考文献

- 1)文部科学省(2008)中学校学習指導要領(平成20年告示)解説 保健体育編, 東山書房。
- 2)文部科学省(2017)中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 保健体育編, 東山書房。
- 3)乳井勇二, 他(2024)体育教師の視点から見た体育理論の促進方法に関する研究:「文化としてのスポーツ」の単位におけるオリンピック・パラリンピック教育に関する学習内容に着目して, スポーツ産業学研究, 34(2), pp119-130。

教員間のリスク共有から考える学校安全

―「けがの防止」におけるリスク要因の可視化を通じて―

早稲田大学 講師 安永太地

1 けがのリスクと楽しさのジレンマ

体育科保健領域の「けがの防止」では、けがの起こり方を理解するだけでなく、危険を予測し、回避の方法を考えることが求められている。一方で、学校における安全教育には難しさがある。例えば、鬼遊びやドロケイ(ケイドロ)、ボール運動などは、子どもにとって楽しく、身体能力の向上や仲間との関わりを育てる大切な活動である。しかし、その楽しさの裏側には、転倒、衝突、落下などのけがのリスクも伴う。けがを避けることだけを優先すれば、「危ないから禁止」という対応になりやすい。しかしながら、安易に禁止事項やルールを増やせば、教育活動そのものが制約され、子どもが自分で危険を予測し、対応する力を育成する機会そのものが失われてしまう可能性がある。このように楽しさや教育的意義と安全とのジレンマがある。

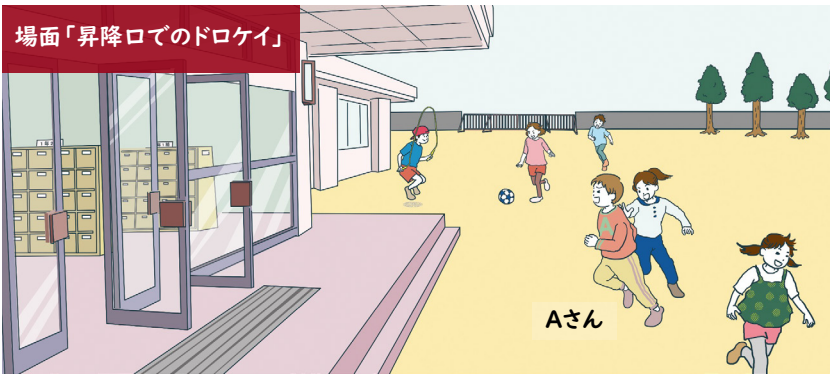
〈図1〉

リスクのものさし					
	レベル 0	レベル 1	レベル 2	レベル 3	レベル 4
からだ 体 への リスク・ダメージ	ケガをしないレベル ケガにならない行動	がまんできるレベル 痛みはあるが、がまんできる程度のケガ	保健室に行くレベル 痛みがあり、保健室に行く程度のケガ	病院に行くレベル 強い痛みがあり、病院に行く程度のケガ	命の危険があるレベル 大量に血がでるなど、命の危険がある程度のケガ
こころ 心 への リスク・ダメージ	イヤな気持ちにならないレベル イヤな気持ちにならない行動	少し気になるレベル 少しイヤな気持ちになるが、すぐに気にならなくなる程度のストレス	イヤな気持ちが続くレベル イヤな気持ちがして、イライラしたり、気になったりする程度のストレス	頭から離れないレベル イヤな気持ちが続いて、ずっと頭から離れない程度のストレス	命の危険があるレベル イヤな気持ちがずっと続いて、苦しくて夜も眠れない程度のストレス
しゃがい 社会 への リスク・ダメージ	迷惑にならないレベル まわりの迷惑にならない行動	まわりに迷惑をかけるレベル 自分のまわりの人に小さな迷惑をかける程度のトラブル	クラス全体に迷惑をかけるレベル クラス全体に迷惑をかけ、謝らなければならない程度のトラブル	学校全体に迷惑をかけるレベル 学校全体に迷惑をかけ、自分だけでなく家族も謝らなければならない程度のトラブル	社会に迷惑をかけ、人生に大きな影響がでるレベル 社会に迷惑をかけ、その後の人生に大きな影響が出る程度のトラブル

©2024 静岡大塩田研、常葉大酒井研、福井大小林研、鹿児島大高瀬研、早稲田大安永研

〈図2〉

Aさんがけがをしたら、どのリスクレベルだと思いますか？



レベル0 ケガをしないレベル	レベル1 がまんできるレベル	レベル2 保健室に行くレベル	レベル3 病院に行くレベル	レベル4 命の危険があるレベル
-------------------	-------------------	-------------------	------------------	--------------------

分け、それぞれをレベル0からレベル4までの5段階で考える。例えば、けがに焦点を置いた「体へのリスク・ダメージ」では、レベル0「けがをしないレベル」からレベル4「命の危険があるレベル」として示している。このようにリスクレベルを設けることで、漠然とした「危ない」を、「どの程度危ないのか」として考えやすくなる。

また、「リスクのものさし」は、危険予知トレーニング(KYT)と組み合わせた活用が有効である。例えば、昇降口付近でドロケイをしている場面を示し、Aさんに発生しうけがのリスクレベルを考える(図2)。同じ場面であっても、「ガラスが近いから危ない」と考える人もいれば、「追いかける子に強く押されるかもしれない」と考える人もいる。ここで重要なのは、レベルに唯一の正解を求めることではない。なぜそのレベルだと考えたのかを言葉にし、他者の理由と比べることで、危険を見る視点を広げることである。

こうしたKYTと組み合わせた実践研究は、児童生徒向けに行われており、リスク評価の理由が多様になることや、目に見えない環境への着目が高まることなど、一定の成果が示されている(安永ほか, 2025)。こうした教材は児童生徒向けにとどまらず、同じ場面をどのように見ているかを共有する手がかりとして、教員が安全意識やリスク認識をすり合わせる際にも活用できる。

3 教員のリスク認識を可視化する

学校の安全指導では、同じ場面を見ても、教員によって判断が分かれることがある。ある教員は「すぐ止めるべき」と考え、別の教員は「少し見守ってもよい」と考える。この違いは、単に慎重か大胆かという性格の問題だけではなく、教員が認識しているリスク要因そのものが異

なっていると考えられる。

筆者らが行った実態調査では、小学校教員等45名を対象に、「昇降口でのドロケイ」の場面(図2)を示し、Aさんのけがのリスクレベル、その判断理由、さらにリスクレベルが高まる要因を尋ねた。その結果、同じ場面であっても、リスクレベルやその理由は一様ではなかった。リスクレベルの判断理由やリスク増大要因には、ガラスや扉、段差、コンクリートといったものや環境に関する要因だけでなく、遊

びに夢中になること、昇降口に逃げ込むこと、出入口から他の児童生徒が出てくると、近くでボール遊びをしていることなど、多様な視点が含まれていた。つまり、同じ学校場面であっても、教員によってリスク認識や判断の根拠が大きく異なる可能性が示された。

ここで問題となるのは、リスク認識に違いがあること自体ではなく、その違いや実践知が校内で十分に共有されないことである。経験のある教員にとっては当然に見えているリスク要因でも、経験の少ない教員には見えにくいことがある。これは、経験の少ない教員だけの問題ではない。経験のある教員がどのような点に注目し、なぜ危ないかと判断しているのかを校内で十分に言葉にされていないことが課題である。

こうした課題に対し、リスクレベルのような基準を用いて判断理由やリスク認識を会議などで検討し、共有することで、教員同士が何を根拠に判断しているのかを話し合いやすくなる。また、重大なけがにつながるリスクの高い場所や場面については、学校全体として介入する基準を明確にしておく必要がある。

その際にも「危ないから禁止」で終わるのではなく、「何が、どのくらい、なぜ危ないのか」を共有することで、教員同士が納得しながら、同じ方向で安全指導を進めやすくなる。冒頭で述べた楽しさや教育的意義と安全のジレンマと上手につき合うためにも、教員や子どもが「リスクのものさし」によるリスクレベルを意識し、共通言語として日常的に活用することで、安全・安心な学校を支える一助となると考えられる。

●引用(図1、図2を含む)

安永太地・梶昭彦・池田明生・堀江秀史・塩田真吾(2025)体育科保健領域「けがの防止」でのリスク評価の力を育てる教材の開発と効果検証, 保健科教育学会誌, 第10巻, 第1号, pp.23-35.

正しく噛むことで 運動能力が向上する!?

東京歯科大学 教授 武田友孝



からだとスポーツ・健康の深い関係を
紹介するシリーズです。今回は、噛むこ
とと、スポーツの関係についてお話を
伺いました。

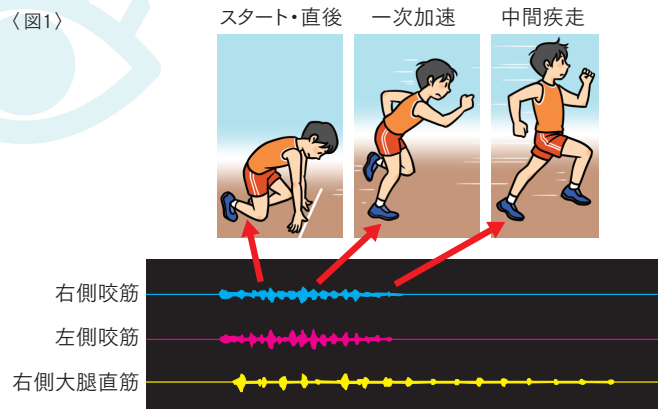
武田 ● スポーツ歯学というと、歯のけがを防ぐマウスガードを思い浮かべるとと思います。しかし、それだけではありません。お口の健康は、運動機能、栄養摂取、睡眠・休養に大きく関わります。そうです、皆さんの健康、身体機能に大きく影響しているのです。小学生の体力測定において、むし歯が少ない人、しっかり噛める人はソフトボール投げ、50m走などの成績がよかったとの報告があります。

編集部 ● 歯の健康と体力測定の成績が関連しているとは驚きです。研究内容についてぜひ教えてください。

武田 ● スポーツ歯学は、選手だけでなく、運動愛好家、国民の皆さんの健康、身体機能の維持増進に貢献しています。スポーツ歯学の主な目的は以下です。①歯と口の健康管理(むし歯、歯槽膿漏、顎関節症等の基礎疾患管理)を行うことによる全身の健康維持・増進 ②歯や口のスポーツ中のけがの予防と安全対策(適切なマウスガードの普及・提供、親知らずの管理、歯列不正の管理) ③けがが発生時の適切な対応(診断・応急処置・治療)と復帰支援・復帰までの歯科的管理 ④噛み合わせや口腔機能の管理・改善から全身の運動能力(筋力発揮・身体バランス)をサポートする ⑤適切なマウスガードおよび噛みしめによる間接的衝撃力による脳震盪の予防、軽減 ⑥総合的な噛む能力の管理(口腔機能の低下の予防・改善)による、身体的能力低下(フレイル)、認知機能低下への管理等です。

編集部 ● 噛むことがスポーツに与える影響についてもう少し伺いたいです。

武田 ● スポーツを行う場合、静的な正しい構え・姿勢から、動的な筋力発揮を行うことが多いです。MLBの大谷翔平選手の鍛え抜かれた体でのバッティングを思い浮かべてください。カッコいい構えから豪快なスイングをしていますね。このときバランス機能、筋力が高いことはもちろん大事ですが、歯や口も大きな役割を果たしています。スポーツ中に強さ・持続時間は異なりますが、噛みしめが起こること、しっかり噛むと全身の筋力が高まること、正しい噛み合わせは体のバランスをよくすることなどが研究でわかってきています(図1)。なかなか思うようなパフォーマンスが発揮できないと思ったら、実はむし歯が原因だった。ということもあります。



スタートから加速までは、上の図にあるように咬筋の活動が強く見られます。しっかり噛むことで体のブレを防ぎ、地面を蹴る力を強くし、かつ体の安定をはかり、無駄なく推進力に使っていると思われます。しかし、そのあとは、リラックスして走るほうがよいので噛んでいません。

Nukaga H, Takeda T, Nakajima K, Narimatsu K, Ozawa T, Ishigami K, Funato K. Masseter Muscle Activity in Track and Field Athletes: a Pilot Study. The Open Dentistry Journal, 10, 3-15, 2016.
イラスト:多田あゆ美

編集部 ● 歯は体のほんの一部のように思っていたんですが、全身の運動能力に大きく影響しているんですね。

武田 ● スポーツと歯科の関連の解明は、前出のように運動能力の発揮に大きく影響しています。それだけでなく、けがの予防・軽減、それも歯だけでなく、転倒予防、スポーツ中の脳震盪の一部(体が揺れて起こるもの)にも効果があるといわれています。パフォーマンスの維持・向上、安全に運動を行うことなどに役立つため、多くの皆さんに理解していただきたいです。

編集部 ● 最後に小・中学生や先生方に向けてメッセージをお願いします。

武田 ● お口の健康は身体機能に影響することを少しはご理解いただけたかと思います。普段から、歯磨き等による自宅での管理、糖分の多い飲食物のとりすぎに気を付ける、早期治療、定期的な予防的受診、歯のけがの予防・軽減(マウスガードの使用)等を行ってください。また、噛み応えのある食べ物をしっかり噛まないと、悪い歯並びやむし歯等の原因にもなります。

編集部 ● 興味深い話をたくさん聞かせていただきありがとうございました。安全に運動を行うためにも歯の健康を心がけていきたいです。

夏休みを
迎えて...

教員の指導力アップ書籍

新任の先生や学級づくりにお悩みの先生にオススメ

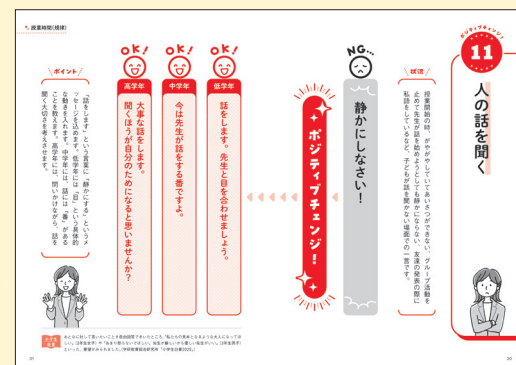
新刊 登校から下校まで!

A5判、128ページ 品目コード: 2380269600

先生の言葉かけ55 ポジティブチェンジ

著: 広山隆行(島根県公立小学校教諭・教育団体「道德のチカラ」小学校代表)
コラム: 篠原菊紀(脳科学者)

1日の流れに沿って使いやすい!
子どもと教室が変わる、
今日から使える言葉かけ実践集



低・中・高学年別に、効果のある言葉かけを紹介。効果を脳科学の見地から裏付けするコラムや、ベテラン先生たちの言葉かけエピソードも満載です。ダウンロード特典付き。

定価 2,200円(税込)

新刊

ほんの少し変えるだけでうまくいく 学級経営・学級づくりQ&A 「あるある」事例62

A5判、176ページ 品目コード: 2380275700

編著: 鹿嶋真弓(立正大学)・吉本恭子(高知市こども未来部子ども家庭支援センター)

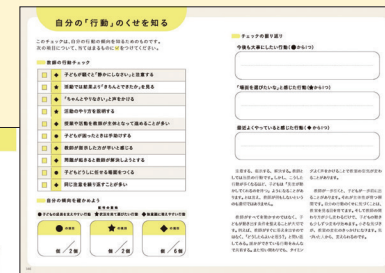
若手の先生が悩む「あるある」を
原因から対応例までスッキリ解説



ほめてもよい行動が続かない子
人とうまく関われない子
注意しても私語が止まらない子
リーダーがいないクラス
考えが深まらない授業 etc

自分の指導を見直し、実践につなげるためのチェックシートや書き込み欄付き。

定価 2,420円(税込)



「スポーツと生きる人」から、スポーツの今とこれからを知る

藤木 豪心 さん

フリースタイルスキー男子モーグル選手／テレビ局ディレクター



Profile ● ふじき ごうしん

1997年、大阪府生まれ。3歳からスキーを始める。立命館大学時代は休学して北京2022オリンピックを目指したものの、夢には届かず、就職活動を経て株式会社サンテレビジョンに入社。現在はスポーツ部のディレクターとして、プロ野球中継などを担当。仕事と競技を両立しながら挑戦を続け、男子モーグル・デュアルモーグルでミラノ・コルティナ2026オリンピックへの出場を叶えた。大会後、現役引退を表明。今後は仕事と、後輩のサポートに力を入れていく。

男子モーグル世界選手権に3度出場し、2026年2月のミラノ・コルティナオリンピックで日本代表に選ばれた藤木豪心さん。株式会社サンテレビジョンのスポーツ部で働く会社員でもある。モーグル競技との出会いや、デュアルキャリアで目指した最高峰の舞台への道のりと挑戦から得たものなどについて語ってもらった。

(取材・文／荒木 美晴)

大阪府阪南市出身。雪がほとんど降らない地域で育ちながら、幼い頃から父に連れられて長野のスキー場へ通った。大人と一緒に滑りたい一心で技術を磨くうちに、コブ斜面



ミラノ・コルティナ2026オリンピックのモーグル会場にて女子モーグル・デュアルモーグル日本代表の妹・日菜さん(右)と。 ©遠藤尚

やスピードにも慣れ、小学校3年ですべてモーグルの大会に出場。そこで同世代の選手に敗れた悔しさが、競技人生の原点となった。

当時から目標はオリンピック出場。高校2年で初の国際大会を経験し、翌年には念願のW杯日本代表に選出。世界への道を着実に歩み始めた。しかし、北京2022オリンピックを目指して強化に打ち込んでいた大学4年の冬、右膝の前十字靭帯を断裂。懸命なリハビリを経て復帰したものの、夢の舞台には届かなかった。

北京への挑戦を最後に引退を決めていた藤木さんは、就職活動を経て株式会社サンテレビジョンに入社。スポーツ部に配属され、ディレクターとして番組制作に携わることになった。新たな環境でリスタートを切ったが、前年の成績によりW杯出場資格を保持していたことや、同じモーグル選手の妹・日菜さんが女子W杯出場を決めたことで、「一緒に戦いたい」という想いが再燃。社会人として働きながら、再び最高峰の舞台

を目指す決意を固めた。

藤木さんの挑戦を支えたのは、自身の徹底した時間管理と周囲の理解だった。スポーツ部ではプロ野球中継が中心となるため、4～9月は昼以降が中心の勤務。出社前の早朝の時間を使ってトレーニングを行い、勤務後にも体を鍛えた。金曜夜の生放送終了後、数時間だけ仮眠を取り、そのまま車で岐阜や長野へ向かう生活も続いた。

競技を再開してから「仕事で第一優先」という考えは変わらなかった。会社には無理を言いつて競技を続けている以上、仕事で手を抜くことは許されない。その責任感が、原動力にもなった。一方で、職場の仲間たちも「練習に行けるように取材を代わるよ」とサポート。オリンピック出場が決まった際には、社内で応援会が開かれるなど、多くの人が自分の挑戦を後押ししてくれたという。

「職場や家族の理解と協力、支えてくれたすべての人への感謝しかない」。その気持ちを胸に臨んだオリンピックでは、男子モーグルで23位、



阪神甲子園球場でのプロ野球中継業務をはじめ、全国高校サッカー選手権兵庫県予選の取材等にも携わっている。

男子デュアルモーグルで18位。メダルには届かなかったものの、「最高だった」と世界に挑み続けた自分を振り返った。

競技だけに人生を懸けるのではなく、仕事と両立した経験は大きな財産になった。「時間の大切さ」を学び、「競技ができるありがたさ」に気づけたことで、スキーは「当たり前」ではなく、心から好きだと思える存在へと変わった。苦しいときを乗り越えた先に、新たな景色が見えたと、藤木さんは振り返る。

今後は、妹や後輩のサポートをしながら、アスリートとして培った視点を生かし、スポーツの魅力により多くの人へ伝えていくつもりだ。

学研・教科の研究 体育・保健体育ジャーナル 第33号 令和8(2026)年8月発行

『小学校体育ジャーナル』(通巻119号)『中学校保健体育ジャーナル』(通巻145号)

●お問い合わせは、「小中教育事業部」へ
〒141-8416
東京都品川区西五反田2-11-8 学研ビル
TEL.03-6431-1151

●「体育・保健体育ジャーナル」の
PDF版は、WEBページから
学研 学校教育ネット
<https://gakkokyoiku.gakken.co.jp/>



発行人 竹重純二
編集人 木村昌弘
発行所 株式会社Gakken
デザイン 西田美千子
表紙イラスト ミヤザキ
印刷所 株式会社広済堂ネクスト

これからも
ずっとともに、
80周年。
Gakken